金光教大阪災害救援隊活動報告

令和６年能登半島地震

その光景は東日本大震災…熊本地震を彷彿とさせる

令和６年１月１日、石川県能登地方を震源とする最大震度７（マグニチュード7.6）の大地震が発生した。死者２４１名、多数の重軽傷者を出す未曽有の大災害となった。

能登半島はここ数年にわたり群発地震を繰り返してきたが、昨年５月５日に発生した「令和５年奥能登地震」では最大震度６強が観測され甚大な被害をもたらしたが、このたびの地震は遥かにその規模を上回り「激甚災害」に指定された。

金光教大阪災害救援隊は即座に情報収集に努め、交通事情や被災地の状況を見極めて準備が整った１月６日に大阪を発った。

管内通牒同封の報告書に記載のとおり、現地は甚大な被害に見舞われており、その光景は東日本大震災や熊本地

震を彷彿とさせるもので、家はことごとく倒壊し、道路は陥没崩落し（酷いところでは車がそこに落ちている）、電柱は倒れ、山の斜面が崩れ落ちていた。海岸沿いを走ると海岸が隆起して海底だった場所が陸になっており、沖合の消波ブロックあたりまで陸地となり堤防も干上がっているなど、これまでに見たことのない状況があった。

報道では火災があった輪島朝市などにスポットが当たり、そちらにボランティアが一極集中するが、実際には能登半島は全体的に被災しているため、支援にバラつきがあることは否めない。先遣隊での調査と、ここまで13年間実績を積んできた横の繋がりを生かした情報交換などの末、救援隊は得意の炊き出しで被災地の支援をすることとなった。

以下、ここまでの管内通牒での報告を取りまとめて記す。

ボランティアは何もできない だからこそできることがある

早速だが、このたびの能登半島地震において様々な困難があり、我々を含む多くのボランティア団体を悩ませた。

一つには、実際の活動を行うにあたっての難点として、道が悪すぎること。アプローチする道が元々少ないうえに土砂災害や道路崩落による通行止めが多く、通行できても道の陥没や亀裂、さらには、いたるところ道が波打っており、渋滞も酷く目的地まで時間がかかりすぎるのである。しかしこれはだんだんと改善され第４次災害派遣の頃には一方通行も多いがずいぶんと改善されてきた。さらには能登半島の厳しい寒さや大雪が道を阻み、被災地に入ることをためらわれたが、この厳しさに避難所で耐え忍んでおられる被災

者の方々を想うと足がすくむことはなかった（実際に午後になると道路の凍結をさけるため早々に引き上げる団体がほとんどであった）。

二つ目は、ボランティア自粛を訴えるボランティア批判が相次いだこと。

やはり我々の13年間の実績から評価は凄くて、たくさんの方に「このたびも行ってくれるのか。ありがとう！」「やっぱり救援隊が動いてくれると思っていた！」と言ってくださる方が大多数である一方、「ネットではボランティアは行かないでと言っているが本当に大丈夫か？」と言われる方も中にはおられ、考えさせられた。

このことについて、災害心理学者の宮前良平先生（福山市立大学）は朝日新聞の取材に対し、ボランティア批判への反対を訴えたものの、炎上することになった。

本人いわく、「炎上は覚悟の上でのことです」。

朝日新聞の記事とは若干異なるが、彼のホームページにはこのように書かれてある。

『ボランティアは不思議な行為だ。大災害を報じるニュースを見て、足がすくむ思いがする。自分は被災していないのに、自分なんかでは被災した方々のつらさを分かち持つことはできないのに、それでも居ても立っても居られなくなる。

極論すればボランティアには何もできない。それでもボランティアに行く。「何もできない」という自己否定は、しかしながら、ささやかな

希望でもある。被災地に行き、一日ボランティアをし、しかし、被災した家の片付けはまったく進んでいるように思えない。あと何週間何ヶ月、この家の人はこのつらい片付けに向き合わなければならないのだろう・・・。私は家に帰れば温かい食事にありつけてしまう。申し訳ない気持ちになる。だけど、そうやって気分が塞いでいても、被災した方から一言「ありがとう。助かったよ」と言われる。助かったのはこっちですと言いかける。

ボランティアは何もできない。だからこそできることがある。このアイロニーこそがボランティアの本質ではないかと思う。

しかし、「ボランティアは何もできない」という表面上の意味だけを知ったかぶりして、「何もできないボランティアが現地に行くのは迷惑だ」と批判する声が増しているように思う。ボランティアのような何もできない素人は引っ込んで、自衛隊

などの「プロ」に任せておけばよいという一見合理的な主張が、見た目の正しさに引きずられて賛意を得ていく。ボランティアのアイロニーは、被災地から遠く離れた正しらしさによって無かったことにされていく。いまはボランティアが出る幕ではないという主張はたしかに正しいのかもしれない。しかし、そうこうしているうちに支援の網の目から漏れ、

苦しむ人は見捨てられている。ボランティアには何もできない。何もできないからこそ、目の前の寒さに凍える人に手を差し伸べることはできるのだと思う。』

非常に共感できる。今回、私が思うことを一言で言うと、「ボランティアの力なくして能登の早期復興はありえない」となろう。

ボランティア批判が相次いだ時、テレビのモニターをとおして自衛隊出身芸人の方が「自衛隊は自己完結できるが、一般のボランティアの方は出来ないので行かないでください」と言った。そしてたくさんの方がそちら側に賛同したように見えた。

しかし実際にはどうだったのだろうか。

私の体感では、能登半島地震の復旧スピードはこれまでのどの災害よりも遅い。4カ月経った今（この原稿を書いた時点）、私たちが支援する輪島市門前町は未だ重機が入って倒壊した家

を解体する姿は一件も見えず、避難所の状況も相変わらずで、他国の方から「先進国なのに難民のよう」と揶揄されている状態が続いている。

拍手を送ってください

多くのボランティアは被災地から一番近い都市である金沢市内のビジネスホテルから被災地に通う。そのため宿

泊費、飲食や資材の費用、燃料費などを金沢で使う。これによって石川県自体が潤う。東日本大震災時の仙台、熊本地震時の熊本新市街のように今後はバブルに近い状況になると思われる。観光が落ち込んで大変だと言っている石川県にとって良いことであろう。

一部の物見遊山や迷惑系ユーチューバーが閲覧数を稼ぐため早々に現地に入って動画配信などをして被災者感情を傷つけたり、そのために道路が大渋滞を引き起こして支援が必要なところへのアクセスに時間がかかったという状況があったようだが、ほとんどは真面目なボランティア団体ばかりである。

以前に寄稿したことがあると思うが、俳優で歌手の杉良太郎さんはあるとき記者から「それってやっぱり売名行為ですか」と言われたことがあり、杉さんは「売名に決まっているじゃないですか。あなたも売名でいいから私と同じことをやってから、もう一度同じ質問をしてください」と返し、「お金がある人はお金を、時間がある人は時間を、お金も時間もない人は、活動をしている人を理解し、行く人にいちいち文句を言わず拍手をするだけで良い。それでも立派な慈善です」と言っている。

どれだけ正しいことをしても必ず批判する人はあるが、本当に立派な方だと思う。

私たちも厳しいけど

話を戻すが、そのようななかでも救援隊はさまざまな団体と協力し合って得意の炊き出し活動を展開している。

当初はどの地域を支援するか、いくつか候補を考えており、まずは石川県立輪島高等学校（以下、輪島高校）への炊き出しを決めた。

輪島高校で設営後、校長・教頭先生の話を聞く。翌日は大阪府吉村知事が派遣したキッチンカーも来て向い合せでの炊き出しとなり、自衛隊も炊き出しを行う。ほかにも炊き出しを希望される団体があり、結局４つの団体が同じ場所で行うこととなった。屋台村のようで、正直なところ炊き出しが来ない避難所もあることを考えるとモヤモヤしながらの作業であった。

その夜、隊員たちと打ち合わせをするなかで、「輪島高校には支援が行き届いているのではないか」「我々はメディア等で目立たなくても支援の薄い

ところに行くべきではないか」「昼に輪島高校で炊き出しを行ったあと、支援の薄い場所に移動して夕食の炊き出しをできないか」という意見があった。モヤモヤしているのは私だけではなかった。

しかし、一日に二カ所の炊き出し（設営から調理、撤収）は不可能に近く、特に隊員3名ではオーバーワークだが、一人の隊員の「私たちも厳しいけど、被災者の方はもっとしんどい思いをされている。私が頑張って出来ることならば支援したい」という言葉に背中を押され、輪島高校を午後1時に切り上げ、あらかじめ目星をつけていた輪島市門前町に向かうことにした。

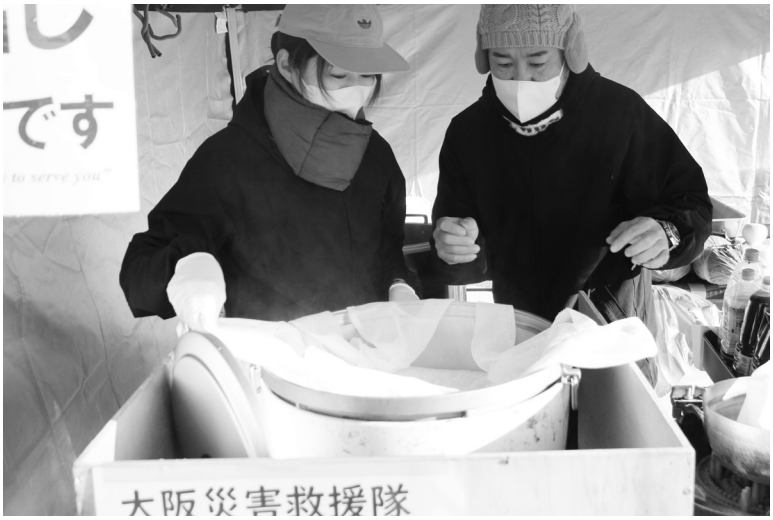
当日朝、緊急車両以外通行止めの道路（炊き出し班は緊急車両扱い）を通り、急いで門前町浦上公民館で施設長に炊き出しを申し出ると非常に喜ばれた。

予定通りに当日は輪島高校で100食の炊き出し「鳥つくね入り豚汁」を提供し（自画自賛ではないが私たちの炊き出しだけはいつも大盛況）、非常に喜ばれたあと、門前町浦上公民館に向かった。輪島高校から浦上公民館は18キロしか離れていない（通常なら20分程度）が、迂回路を通って1時間50分かかった。

炊き出しもほとんど来ない浦上公民館では暖かい炊き出しを非常に喜ばれ、また、午後2時50分に到着して、4時30分（お年寄りが多いことと、電気の供給が薄いため早くに消灯となるため）からの炊き出しに間に合わせるため、移動の間に車中にてテント位置やテーブル、調理台などの位置まで打ち合わせをし、なんとか約束の提供時間に間に合った。

これは、どこの団体にもできないこと。駐車場で車中避難をされている方々が、私たちの帰り際に車から降りてきて、「この手際の良さと美味しさ、炊き出しの方はこれまでにも来ていただきましたがこのようなことはなくて驚きました。ありがとうございました」と拍手をいただいた。

そして我々はこの門前町浦上地区への継続的な支援を決め、これまで5回の炊き出しとその他、物資の支援などを行っている（この記事をお読みいただいている頃にはおそらく9回目の炊き出しの頃だろうか）。



私には何もできない

先ほども記したように、能登半島の気候は厳しくて、2月の炊き出しの際は大雪が降ってどんどんと道に雪が踏み固められていく。重い車の運転にも気を遣ったが、なんとか無事に支援先の避難所「門前町浦上公民館」にたどり着いた。設営していたテントには雪が積もっていた。

避難所には当初１００名が避難していたが、金沢市内や県外の親戚を頼って二次避難されている方も多く、当日は80名にまで減っていた。

しかし、一旦は避難所を離れても二次避難場所ではほとんど情報も入らないため、仮設住宅の抽選があっても参加できなければいつまで経っても仮設住宅に入れず、さらには帰ってきたときには浦島太郎状態になって村八分ということも多くある。それを避けるために早々に二次避難所から帰ってくる方が多く、それゆえに公民館での避難者が増えたり減ったりしながら80名から１００名を推移していた。

その日の炊き出しには、協力関係にある大阪大学から稲場圭信教授（大阪大学大学院教授・宗教学者、社会学者）をはじめ、院生、学部生、九州からは本願寺派のお坊さん（熊本地震の時から協力関係にある）も駆けつけてくれてにぎやかな炊き出しとなった。

昼食の「救援隊名物・焼肉丼」を提供すると、早速、稲場教授が避難所に入ってリサーチを開始し、興奮して戻ってこられた、「竹内さん、避難所の中が大変なことになっています。みなさん大喜びされているので、ぜひとも中に入って様子を見てこられたほうがいい」と言われるので避難所の様子を見に入った。

「いかがですか？お口にあいますか？」と尋ねると、皆さん喜んで「美味しいです」「とても嬉しいです」などと口々にお礼の言葉をくださった。

実は私にとってはここまでは想定の範囲内で、これまでどこの災害地に行っても我々の作る心のこもった食事は喜ばれてきた。

ところがその後、テントで立ち話をするなかで稲場教授から、「私はこれまでにいろんな団体の炊き出しを見てきましたが、今の金光教大阪災害救援隊の炊き出しは日本一だと思います」と言ってくださった。

これまでずっと被災地を見てこられ、災害のすべてを把握していると言っても過言ではない稲場先生からそ

う言っていただけると、少人数で一生懸命やっている私たちへのリップサービスが含まれているとしても、13年前の東日本大震災時「曹洞宗シャンティ国際ボランティア会」の炊き出しを見たとき、その姿に圧倒され「私には何もできない」「自分もいつかはああなりたい」と辛酸を舐めて帰ってきたあの日を思い出した。

あれから13年経った今、たくさんの方々の支えと協力をいただき、隊員もどんどんと鍛え抜かれ、やっと他団体に少しは追いつけたかなと思う。

ここからが本当の支援

これまでの報告書にも記載してきたが、この輪島市門前町浦上地区は、今ある避難所「浦上公民館」の目の前に3月末、33戸の仮設住宅が建った。そして3月23日、炊き出しをもらいにきてくださった浦上公民館避難者の方が救援隊員にぼそっとこぼされた。

「入れなかった…。」

衝撃的な一言だった。

この仮設住宅は抽選ではなく行政が入居者を決められた。入居を希望する方が多数あったようで、入居できる方の基準は行政の方しかわからず、入れなかった理由など教えてもくれない。3月24日から入居が始まったが、「浦上公民館」に避難されている方の中にも入居できる方とできない方が半々に分かれた。そして行政からの説明会によると、最終の仮設住宅入居は8月になるとのことで、今回決まらなかった方がどこの仮設住宅に入れるのかもわからない。

やっと仮設住宅に移れると期待し、辛い中にも楽しみにしていたことが崩れ落ちた。また苦労が絶えない今の避難生活が続き安心して生活するには至らない。そして我々の炊き出しを受け取りながら「入れなかったって…」と涙をこぼされた。私たちはただ話を聞いて寄り添うことしかできなかった。

ここ「浦上公民館」には婦人会組織があり、このたびの災害を受けて一世帯につき一人が婦人会に出て、避難所で毎日毎食のお世話（行政から配られる食料を配ったり、汁物を作ったり）をされていたが、それぞれに仕事があることも勘案されて3月末に婦人会活動を解散されることとなった（避難所も統合される可能性はあるがしばらくはそのまま）。向い合わせに避難所と仮設住宅があり、さらにはインフラも整っていないが自宅避難をされている方がたくさんおられる。今後たくさんの問題が起こってくるであろう。

私たちができることは、月に1回か多くても2回であり、予算やさまざまな都合上それくらいのことしかできないが、それでも支援くださるみなさんの気持ちを背負い、心を込めてお訪ねし、炊き出しやカフェなどを通して関係性を築いていき、傾聴活動に努めていきたい。

他所から来ている私たちにだけ話せることがたくさんあり、溜まったストレスを吐き出せる場所でもある。ここまでの経験上、私たちの存在が非常に

大切なことだとわかっている。関係性が出来てくるここからが本当の支援となる。

支援が届かない珠洲市のことも気になるので、まだ活動の先行きがどうなるかというところではあるが、今のところは、この浦上公民館と新しく建った仮設住宅の間に立って長く支援活動を続けていきたい。○

サッカーチームからの支援物資を届ける

なお、『東日本大震災第43次派遣、令和元年台風19号被害（宮城県丸森町）第12次派遣、能登半島地震第3次派遣』を3月7日から14日の行程で、『能登半島地震第4次派遣』を3月23日から25日の行程で遂行させていただきました。

以下、要点のみ報告し、管内通牒に同封する報告書は本号に記載をもって割愛させていただきます。

能登半島地震第3・4次派遣

まずは能登半島地震の石川県輪島市門前町に物資を届けた。このたびの災害を通して国連機関とも繋がることができ、その国連機関と提携するサッカーチーム「浦和レッズ」からの支援品をいただいた。門前町浦上公民館に100セット、門前町黒島公民館に70セットを届けた。この物資は「ディグニティーキット」と呼ばれるセットで、女性やお年寄りの尊厳を守るためのキット（物資）が入っている。内容は手鏡や生理用品、化粧水や乳液など、またお年寄り用には介護用のおむつなども入っている。

黒島公民館は曹洞宗シャンティ国際ボランティア会（以下、シャンティ）の方に紹介していただいて初めて訪れた避難所だが、60名ほどの避難者がおられ、喜ばれた被災者の方が私たちにコーヒーを淹れてくださって新たな関係性ができた。

シャンティは総持寺祖院（総持寺祖院とは曹洞宗の元となるような格を持つお寺）が大規模に被災し、行政から委託を受けてボランティアセンターを早々に立ち上げ、門前町を丸ごと支援されている。

先日、宗教者災害支援連絡会（島薗進代表）の会議で金光教大阪災害救援隊として発表の場をいただき、会議に出席している各宗教団体の代表者と連携を図った際、シャンティの代表者とも繋がりを持つことができた。

さっそく現地のシャンティ本部を訪ね、私たちが総持寺祖院のお膝元である門前町（我々で例えると金光町のよ

うなところ）で活動しており、これからも拠点を置きたいことを話すと、我々の活動については既にご存じで、「こちらこそお世話になります。住民の方々の大きな力になります。お困りごとがあればなんでも私どもにおっしゃってください。どうぞご自由に活動をお願いします」と協力関係を構築することができている。

日本一のボランティア団体は懐が深く、現地でも大活躍で頭が下がる。

東日本大震災第43次派遣

東日本大震災の被災地は13年を迎えた。今年の三陸地方は大雪が降り雪かきをする姿が見られた。家々を訪ねると、やっぱり毎年同じように「お帰りー！さあさあ早く入ってー」と迎えてくれる。

今年は珍しく会いたい方全員と会うことができたが、大変残念なことにお亡くなりになった方や病気をされている方が多く、入院先の病院まで会いに行ったりと、複雑な思いのする訪問となった。

それでも訪ねた先の皆さんは喜ばれて当時の話をされたり、能登半島地震のことを気にされ「13年経ったらここまで復興することを知ってもらって、今は頑張ってほしい」と能登の方に伝えてほしいとメッセージを託された。

令和元年台風19号被害（宮城県丸森町）第12次派遣

令和元年台風被害の宮城県丸森町を訪問すると、「昨年12月15日に全ての方が仮設住宅から出られ、元の家をリフォームして戻るか復興住宅に入られました。役場としての役目を一旦終えたので復興支援室も今月末までとなります」とのことで、さらに、「金光さんは行政の手の届かないところをやってくださって本当にありがとうございました。そういった部分はボランティアに頼るしかないけど、当時はどう連携したらいいのか手探りの状態でした」「持ってきてくださったカレーの味が忘れられなくて思い出すと涙が出てきます」と言ってくださった。担当してくださった丸森町の職員は1月末に能登町の被災地に派遣され、被災した町としてのアドバイスを伝える任務にあたられている。

以上、報告を含む大阪センター通信への寄稿とさせていただきます。

教区の先生方をはじめ、信奉者のみなさま、ご支援をくださっている企業や一般の皆様には、いつも温かい励ましのお言葉やたくさんのご支援をいただきありがとうございます。

引き続きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

（文責・竹内真治）